

卒業生を対象とした保健師交流会の活動経過

辻 よしみ^{1)*}, 小島 千明²⁾, 高嶋 伸子¹⁾, 合田 加代子¹⁾, 林 佳子¹⁾

¹⁾香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

²⁾香川県坂出市けんこう課

Progress of a Public Health Nurses Meeting Aimed at Nursing Graduates

Yoshimi Tsuji^{1)*}, Chiaki Kojima²⁾, Nobuko Takashima¹⁾, Kayoko Gouda¹⁾, Yoshiko Hayashi¹⁾

¹⁾Department of Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences

²⁾Health Department, Sakaide city

要旨

本学において保健師の交流会を平成22年より開催している。この会の目的は、保健師となった卒業生が就業先での経験を振り返り、課題を共有する場を提供すること、また知識や技術を深め、高度な専門職業人として活躍できる人材育成を卒業しても継続して行うことである。

今年、その交流会も5年目に入った。そこで、卒業生が主体的に活動できる会に発展していくために、交流会の経過や活動を整理し課題について考察した。

交流会は4年間で13回開催された。活動内容は、①事例検討②研修会③活動報告④情報交換及び情報発信（ニュースレター作成）である。この会を通して、卒業生は学習意欲を刺激し、知識や技術の習得に努めていた。また、保健師同士が、互いに理解しあい、意見を肯定的に受け止めてくれる場になっていた。合わせて同じ職種同士のネットワーク形成の場ともなっていた。地域看護学領域の教員として、今後も卒業生がより主体性をもって運営できる様に支援していくことが役割と考える。

Key Words: 保健師 (public health nurse), 交流会 (meeting), 支援過程 (support process)

*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 辻 よしみ

*Correspondence to: Yoshimi Tsuji, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123, Japan
E-mail: tsuji@chs.pref.kagawa.jp

I. はじめに

平成9年の指定規則において統合カリキュラムが導入され、全国的に看護師と保健師免許受験資格を4年間で同時に取得する教育が展開されて保健師養成数が大幅に増加した。一方、実習を受け入れている地方自治体は合併等の統廃合が進み、学生の人数増加の受け入れ等に苦慮していた。これらの状況から、臨地実習でも個人・家族支援の基本である家庭訪問や集団への健康教育等の経験が少なくなり保健師学生の卒業時における実践能力を高めることが教育課題の一つになっていた。

そして、保健師教育は保健師助産師看護師法の一部改正により平成22年4月より修業年限が6か月から1年以上の教育となった¹⁾。また、保健師の体系的研修の必要性も指摘され、平成23年に厚生労働省では新任保健師の研修のガイドライン²⁾が提示された。

本学でも、平成16年度から大学教育に移行し統合カリキュラムを導入し、県内の自治体等の協力を得ながら地域看護学実習を展開してきた。また、平成24年度入学生からは、実践能力を向上させるために保健師選択制を導入することになった。しかし、平成23年度入学生までは、上記の様な教育下で、卒業時までには到達すべき実践能力に達することが十分ではなかった。そこで、平成22年度から本学を卒業し地域保健活動を展開している保健師に、継続的支援として保健師交流会（以後、交流会と略す。）を実施することとなった。交流会では、就業先での経験を振り返り、課題を共有する場の提供、知識や技術を深め、高度な専門職業人として活躍できる様に支援をしている。そこで、交流会の経過を整理し、活動の現状を検討し課題を明らかにする。

II. 交流会の概要

1) 本学における保健師養成課程の変遷と交流会開催の経緯

本学における保健師養成課程は、平成14年から専攻科による1年間の教育課程を行い、平成16年から大学教育に移行し、統合カリキュラムを実施してきた。統合カリキュラムは看護師養成の側面で見ると、地域看護の視点をもつ看護師の養成として評価できる³⁾とあるように病院から地域、地域から病院といった継続的看護の視点を持つことができるようになった。

しかし、保健師養成においては、統合カリキュラム導入により、養成人数が30名から70名と増加し、それに伴い、地域看護学実習は県内の保健所6か所、17市町の自治体等では、学生の受け入れに限界が生じていた。そのため、保健師学生として卒業時までには到達すべき実践能力までに達することが十分でないといった課題も生じてきていた。

一方、このような状況の中、保健師として就職した卒業

生から「同じ様に保健師とし就業している人と交流したい。悩みを共有したい」「他の勤務先での状況を知りたい」という希望もあがってきた。また、大学教育を修了した保健師も少しずつ増え、グループ化が可能となっていた。そこで、地域看護学領域の教員は、本学を卒業し地域保健活動を行っている保健師を対象に、卒業生同士が課題を共有できる様に保健師の交流会を開催することとした。

2) 目的および活動内容

交流会の開催にあたり、卒業生が目的や内容について共通理解し本来の目的に立ち戻れるよう、その内容を明文化しておく必要性を感じ、大学側から規約の作成を提案した。その後、卒業生同士で話し合いを経て平成25年4月に交流会の目的を「日常の保健師活動を振り返り、共に保健師活動についての知識と技術の向上を図ることを目指す。さらに活動を通して会員相互の情報交換、親睦を図ること」とした。

また、活動内容は、卒業生個々の課題や学習を共有していくために、①会員相互の事例検討会②講師による勉強会、研修会③話題の提供と意見交換④会員相互の親睦⑤その他交流会の目的達成のために必要な活動とした。

3) 活動期間

平成22年8月から開催し、平成26年9月までに定期的に年3回実施し、そのうち1回は研修会を開催した。

4) 交流会の運営について

会の役員として、会長・副会長・会計・会計監事1名ずつとして1年任期としている。会開催にあたっては、開催毎に司会者や記録者、事例提供者を決め、案内方法や場所、内容等について教員と相談している。同じ卒業生ばかりに負担がかからない様に輪番制で担当者を決めている。運営費として、負担がない程度の年会費を徴収している。

5) 会員

会員は香川県立保健医療大学同窓生で、交流会の趣旨に賛同する会員とした。

保健師で就職した卒業生は、平成19年度から平成26年10月現在で（途中で保健師として再就業した者を含む）41名である。その就業先の内訳は市町31名、保健所5名、その他の病院等が5名で、県内業者は25名、県外16名である。

また、大学教員は相談役とし、特別会員という立場で地域看護学領域の教員4名が参加している。

6) 交流会の名称

交流会の名称は根若会（こんじゃくかい）とした。

名称の意味は、土に根をめぐらせて大きな芋をつける

サツマイモから、「地域」に根ざした活動で、「健康」という大きな花を咲かせる」という保健師の姿をイメージしたもので、さらに会のメンバーがあきらめず困難に立ち向かえる「根性のある若手」となることへの願いが込められている。

Ⅲ. 活動内容

交流会の活動内容を整理したものが表1である。

交流会は、平成22年8月～平成26年9月までに、10回の定例会と3回の研修会を開催している。会の参加者数は、延べ147名になる。研修会開催時や新年度は、やや参加人数が多くなることがあるが、1回平均10.8名の参加者数となっている。会の参加については卒業生の自由意思としている。

活動内容を分類すると、①事例検討②研修会③活動報告・研究発表報告④情報交換と情報発信⑤今後の活動であった。

1) 事例検討

家庭訪問の個別事例では、保健師1名が、対象者に関わり、その場で対象把握し、支援を判断し展開していくことが多い。その様な場合、卒業生の大半が新任期保健師であることから、免許を有しながらも、知識や技術は不足しており、対象把握能力や判断が十分でない。まして、本人も知識不足や技術の未熟さを知りながら対象と関わっていくことは不安も大きい。そこで、1名の卒業生が体験した事例を他の卒業生と共有し、保健師の固有の援助技術を明確にし、保健師の役割や機能を検討していくために事例検討を実施することにした。

事例検討を行うにあたり、目的、手順や進め方、留意点を共有するために、あらかじめ大学教員から事例検討の方法について講義を実施したのちに行った。また、事例提出においては、個々が特定できない様にすることや検討会資料の回収及び口外しないことを原則に実施している。また、検討においても対象者の処遇検討ではなく、保健師としての個別支援技術の追求ができることを目的

表1 根若会の経過

NO	開催年月日	参加者(人)					会の運営	事例検討テーマ 事例提供者①:1期生②:2期生 ③:3期生	研修会等	情報発信 (レター内容)
		卒業生	教員	在校生	合計	延べ人数				
1	H22.8.7(土)	6	4		10	6	会の目的説明・自己紹介 情報交換・近況報告 交流会の進め方・役員選出 交流会の名称募集		会の経緯と目的・情報交換報告・参加者の感想 交流会の名称募集	
2	H22.12.4(土)	8	4		12	14	交流会の名称決定 「根若会」	1. アルコール依存症を併発した統合失調症ケースの関わり③ 2. 第1子が赤ちゃん返りの強い母親への対応③	事例検討を振り返って 「根若会」に名称決定	
3	H23.4.23(土)	10	4		14	24	情報交換 交流会のキャラクター募集	1. 第1子が赤ちゃん返りの強い母親への対応:検討後報告③ 2. 本人から保健師訪問のニーズがないが、家族からの見守りのニーズのある場合の対応①	事例検討を振り返って 参加しての感想	
4	H23.8.20(土)	5	4		19	29	今後の「根若会」のあり方	1. 本人と家族のニーズが違うケースの支援のあり方②	新任研修まとめ報告 「住民の力を活かせる保健師になるために～課題も答えも地域にある～」	事例検討を振り返って 新任保健師研修発表を振り返って
5	H23.12.17(土)	8	4		12	37	情報交換	1. 本人と家族のニーズが違うケースの支援のあり方:検討後報告②	学会発表報告 「保健委員の地域活動への意識」	事例検討を振り返って 先輩保健師の発表を聞いて
6	H24.4.14(金)	11	3		14	48	平成24年度の運営について 会の目的・内容の共有 今後の方向性・自己紹介	1. 家族の支援が得にくい同居認知症高齢者の支援①	事例検討を振り返って 根若会に参加して	
7	H24.9.9(土)	12	4	4	16	64	夏季研修会打ち合わせ (H24.7.25) 根若会規約検討		研修「乳児の成長・発達の診かた」 :保健師のスキルアップセミナー :小児科医師	開催報告 在学生の声
8	H24.12.22(土)	6	4		10	70	情報交換	1. 家族の支援が得にくい同居認知症高齢者の支援:検討後報告① 2. コミュニケーションをとれない精神疾患患者への関わり方と今後の支援の方向性②	開催報告 事例検討を振り返って	
9	H25.4.20(土)	20	4		24	90	平成25年度の運営について 根若会規約決定 会計報告・役割分担 自己紹介・情報交換	1. コミュニケーションをとれない精神疾患患者への関わり方と今後の支援の方向性:検討後報告②	学会発表報告 「若い世代の子宮頸がん検診の受診行動に関する研究」[管内における高齢者結核対策の取り組み]	開催報告 新任保健師より根若会に参加して
10	H25.9.14(土)	12	4	2	16	104	情報交換・連絡方法 役割分担		研修「未熟児訪問のコツをつかもう」 :保健師	開催報告 研修会に参加して
11	H25.12.21(土)	17	3		20	121	次年度の計画について	1. 家族や周囲の支援が得られにくい母子の支援について③		事例検討を振り返って 事例検討に参加して
12	H26.4.19(土)	16	4		20	137	平成26年度の運営について 会計報告 ワールドカフェ	1. 家族や周囲の支援が得られにくい母子の支援について:検討後報告③	新任研修まとめ報告 1. [介護予防意識が低いと考えられる地域への効果的なアプローチを考える-介護予防事業の視点から-] 2. [特定保健指導未受診者の効果的なアプローチを考える-家庭訪問を通して個から集団・地域を捉える]	開催報告 参加者からの感想
13	H26.9.6(土)	10	2		12	147	意見交換 役割分担		研修「健康教育をブラッシュアップしよう」 「健康教育の実際」 「健康教育の基本について学ぶ」 :大学教員	開催報告 参加者からの感想

としている。

事例検討は、精神疾患を有する者や育児中の母子、家族支援、中には処遇困難事例（表1）などの卒業生が関わっている事例を用いた。

事例提供する卒業生は、負担感を感じながらも、対象の情報を整理できたり、自分の活動を見直したりできている。また「真剣にメンバーが話を聞いてくれ、考えてくれる」という言葉も聞かれ、同じ教育を受けた者としての共感を感じていた。また、自分自身の思考の傾向に気づけたり、自身の活動を支持されたりすることで、「心が軽くなった」という意見も聞かれた。事例検討の場が互いに気兼ねなく話し合える場となり、また卒業生にとって保健師活動とは何かという原点に立ち戻る意味ある場となっていた。

2) 研修会

研修会の目的は、卒業生が現在抱えている課題を解決するための知識や技術の習得である。そのため年1回、大学同窓会の支援を受け研修会を開催している。研修会では、新任期保健師として共有できる課題について、会員からの意見を聞き、教員がテーマ選定、講師選択、内容等を決め実施した。第1回は、「乳児の成長・発達の診かた：保健師のためのスキルアップセミナー」と題して、小児の脳科学を専門としている医師からの講義と演習の研修会を行った。また、第2回は「未熟児訪問のコツをつかもう」と題して、低出生体重児への関わりと支援についてのパンフレットを作成した県保健師を招いて研修会を開催した。今年度は、「健康教育をブラッシュアップしよう」と題して、講義と指導案の作成について、本学の教員が講師となった。また、この研修会では保健師として就職を希望している在学生に呼びかけ参加も促している。

どのテーマも新任期保健師の実践能力に直接関係すると思われるテーマを選定したことや夏季休暇中に開催していることもあり、県外に就職した保健師も参加するなど好評を得ている。

卒業生は、地域の実践活動を展開することで、学生時代の知識や技術がそのまま活用できるのではなく違いが



図1 研修会風景

あることを実感している。しかし、また大学で互いに研修会で学ぶことで、保健師活動の基本を考える機会とされる様にしたいと考えている。

3) 活動報告・研究発表報告

交流会では活動報告も行っている。新任期研修で各自がまとめた内容を発表したり、研究の学会発表内容を報告したりしている。

4) 情報交換と情報発信（ニュースレター発行）

保健師は行政に就職することが多く同年代の職種が複数職場にいることはまれである。また、交流会に所属する保健師は新任期が多く、業務経験や行政ネットワークの広がりも少なく、同職種で仕事内容や課題を共感できる仲間はあまりいないことが多い。そこで卒業生同士が情報交換し合える様に連絡網やネットワークをすることで、普段の地域保健活動でも、他の自治体等に所属する仲間と情報交換して交流会以外の仲間づくりに繋がってきている。特に、4月は卒業したばかりの新入会員に向けて先輩の卒業生が歓迎会を開催しており、就職直後の不安の多い卒業生の再会の場ともなっている。

また、情報発信するために、会開催後に参加者が交流会を振り返りニュースレターを作成し、12号まで発行している。内容は、会の開催内容や事例検討を行っての感想、参加しての感想、参加在学生の声や次回の案内等である。このニュースレターは、各会員にメール等で配信している。

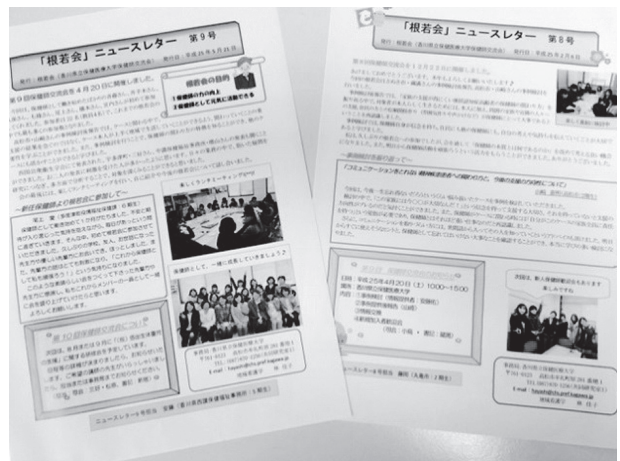


図2 ニュースレター

5) 今後の活動

役員会で今後の活動についての話し合いを行った。その場では、情報交換や他の市町の保健師と繋がれることを有益に感じていた。その一方、事例提供の負担感や連絡調整がスムーズに行えていない事などの課題も出てきている。しかし、教員が卒業生のために交流会の活動支援を行う過程を見聞きしたり、時に卒業生が主体となって開催するといった経験を経て、交流会を自分達の会と

して認識し「みんなが自発的に動ける・学ぶ・交流会にしていこう」という意識を共有している。

IV. 考 察

現在まで展開してきた活動について考察した。

1) 事例検討

今まで、6件の事例について、教員がファシリテーターとなり検討を実施した。また、事例検討後は、次の交流会でその後の報告をしてもらっている。交流会が2か月に1回の開催であり、検討回数には限界がある。しかし事例検討は保健師としての固有の援助技術を明確にし、新任保健師の力量形成に重要なことと考える。現段階では新任保健師が多いため、経験がまだ浅く、事例に対して深く洞察し検討していくことは十分とは言えない。そのため経験を深めながら、事例検討を継続し、検討内容の本質を追究し卒業生の学びを深めていけるようにしたい。

2) 研修会

3回実施した研修会は、課題を解決できるための知識や技術の習得ができるために開催した。実施にあたっては、会員の意見を集約し、共通のテーマ、また実践に繋がりがやすい内容を選択できる様に心がけている。そのため、講義後の質問も、より具体的な内容が多く、自己の活動を振り返りながら保健師として知識や技術の必要性を実感できている。

また、在学生の参加により先輩保健師との繋がりをもてる機会ともなっており、在学中からのネットワーク形成にもなっていると考える。今後は、学生の成長に応じたテーマ設定や支援について検討していく必要がある。

3) 活動報告・研究発表報告

香川県において、新任保健師研修を全保健所・自治体等の保健師を対象に行っている。交流会の会員は新任者が多いため、研修対象者の成果発表の場の1つとして、会で発表することで、自己の学びの整理にもなっている。またその報告を聞くことで、後輩は次年度に行われる自己の新任研修についての理解や予測ができていた。また、自分の次のステップに向けた課題について考える機会ともなり、普段は自主的な学習はなかなかできないが、会に参加することで学習の重要性を再認識でき、自己の保健活動を振り返ることができたという意見もあり、学習意欲を刺激したり高める役割を担っていた。専門職として、個人のスキルアップに向けての意欲を高める場となったり、互いに切磋琢磨できる場となれる様にしておく必要がある。

4) 情報交換と情報発信

交流会に関して、会員の意見を聞いたところ、卒業生の多くが新任期であるため、同期という近い存在がいることで安心感を持ち、同じ悩みをもつ人がいること、愚痴がいえることや同じ職種だから理解し合え肯定的に悩みを受け止めてくれる。普段は関われない他の市町の保健師と関わったり、情報交換ができる等の意見があった。この様に平常の活動だけでは培われないネットワーク形成の場になっていることがわかった。

また、普段参加しない卒業生が自己の活動に疑問を生じたり、閉塞感を感じたので参加したと言ってきた。このことは会の目的以外に、自身の活動の原点や拠り所となる場をこの会に求めたと考える。卒業生が何らかの支援を求めた時に気軽につどい話ができる場としても交流会の役割があると感じた。

会開催後にニュースレターを作成することで、会の振り返りの機会ともなっている。また、次回の予定を確認できたり、参加していない会員も会の経過や状況を把握できる機会となっている。

今後は、大学のホームページ掲載等も視野に入れることで、情報へのアクセスが簡易になり、もっと気軽に参加できる場として存在していけると考える。

5) 今後の活動

卒業生は交流会を自分達の会という意識を共有している。当初より、卒業生とともに教員が活動を実施してきたが、より一層、卒業生に主体性をもって会を運営していけるように、会の役割を具体化・明確化することや、会の計画を自ら行うこと、キーパーソンとなる卒業生へのアプローチ等の支援をしていく必要がある。また、4年を経過し、卒業生が新任期から中堅期に変遷していく中で、各段階に応じた役割を検討していく必要がある。経験を経て卒業生同士が共に課題共有のために、研究や学習を行える様になり、年代や職場の枠を超えた繋がりのある会になっていけるように支援していきたい。

まとめ

今回、交流会の経過を整理し、活動の現状を検討し課題を明らかにしてきた。

その過程で、事例検討や実践報告等を基に保健師活動の本質を追究していくことや学生の成長に応じた支援方法の検討等の課題があることを再認識した。

現在、活動評価までには至っていないが、卒業生が交流会に参加することで、自己の活動の疑問点を解決したり、他の仲間からの意見を聞き振り返る機会をもつことで、知識や技術の向上に少しずつ繋がってきていると感じている。

このような活動は、大学主導ではなく、会員同士が個人および会全体の目的に向けて活動を推進していくことが

重要である。そのために大学は会の発展過程に沿った活動を支援していくことが役割と考える。

交流会が新任期から中堅期へと繋がり互いに成長できる仲間づくりに発展していければと考える。

文 献

- 1) 文部科学省HP 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について(通知) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/1305957.htm (最終アクセス:2014年10月10日)
- 2) 厚生労働省HP 新人看護職員研修ガイドライン～保健師編～ <http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryou/oshirase/dl/130308-3.pdf> (最終アクセス:2014年10月10日)
- 3) 佐藤公子. 保健師教育の課題と方向性—看護系大学統合カリキュラムに対する学生の意識調査—. 日本看護協会講演集:地域看護 42:213-216, 2012.
- 4) 佐伯和子. 看護学生が学ぶ地域看護学とは. 看護教育 53(5):363-369, 2012.
- 5) 尾崎伊都子, 門間晶子, 田中昭子, 肥後恵美子. 本学部卒業生による保健師交流会の活動紹介. 名古屋市立大学看護学部紀要 9:45-47, 2010.

Abstract

Our university has been holding a meeting of public health nurses since 2010. The purpose of this meeting is to provide our graduates, who are now public health nurses, with an opportunity to reflect on their experiences at their workplaces, share problems, improve their knowledge and skills, and develop as personnel who can flourish as superb professionals.

Four years have passed since we held first meeting. At the meeting, graduates summarized its progress and activities, and discussed problems, so that the participants are able to act proactively.

The meeting has been held 13 times in 4 years. Its activities are: (1) discussion of cases, (2) training sessions, (3) reporting on activities, and (4) information exchange and transmission (production of newsletters). Through the meeting, the graduates have been motivated to learn, and have made efforts to improve their knowledge and skills. The meeting has also enabled the public health nurses to understand and positively accept the opinions of one another. Furthermore, it has given an opportunity to develop networks among colleagues. We think that one of our roles as teachers of community-based nursing is to support our graduates so that they are able to hold the meeting more proactively.

受付日 2014年10月17日

受理日 2015年1月14日